東京都北区立袋小学校

令和5年度　北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和5年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、「書くこと」に関する領域においては、学年が上がるにつれて区の平均正答率を下回る傾向が見られた。普段から書く習慣を身に付けられるよう、低学年のうちから書く力の育成を推進していきたい。
社会	学校全体（5，6年）の社会の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等である。やや知識の定着に課題が見られる様子があることから、単元学習後に復習の機会をもつなどの工夫をしていきたい。また、内容別では「都道府県の様子」「工業生産」で課題が見られているため、知識・技能面の定着を図っていく必要がある。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、学年が上がるにつれて区の平均正答率と同等となる傾向が見られた。特に、観点別では「主体的に学習に取り組む態度」の正答率が低くなっている。基礎・基本的な力の定着を図るとともに、問題解決型の授業を展開させていく必要がある。児童自身が自らの学習課題をもち、主体的に学習に取り組んでいけるようにしていきたい。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。どの領域や観点別においても、区の平均正答率を上回っているものが少ない。このことからも、基礎・基本の定着を図りつつも、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。

本校の教育目標

〇よく考える子

〇体をきたえる子

〇思いやりのある子

〇最後までやりぬく子

学力向上にかかわる経営方針

・「わかる」「できる」喜びを味わえる授業改善
・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実
・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進（きたコンの扱い方を含む）
・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用

本校が児童に育成したい力

・生きて働く「知識及び技能」の習得
・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成
・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

校内における学力向上推進体制

学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点

指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・授業のユニバーサルデザイン化 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・Q－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの計画 ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携	・運動の楽しさや喜びを味わい、三つの資質・能力を育む体育学習を目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観−ブロック会での事後検討を通して− ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月１回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案　（1年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	ひらがなを習得してスムーズに音読できる児童が増えた反面、いくつかが未習得のためにつまずきの見られる児童が1割ほどいる。また、ひらがなを習得し終えたばかりであるため、「は、へ、を」と「わ、え、お」を混同している児童や、促音や拗音、濁音を使って上手に文を書けない児童、短文を書き終わった際に句点が書けない児童がまだまだ多い。読み書きを、一層丁寧に指導していく必要がある。	ひらがなについては教科書を読むことや、教材文や板書を視写することなどで復習しながら習得させていく。また、読書タイムや図書室を利用する時間を有効に活用し、様々な文に触れ、「は、へ、を」や促音、拗音、濁音などの正しい使い方や、句点で終わる文の構成が理解できるように指導していく。	宿題の音読については自分でも読んだ内容を聞けるように、児童用端末のアプリ「ロイロノート」を活用して録音したり、読んでいる様子を録画したりして発音や口形などを意識させるようにする。また、考えたことを少しずつ詳しく、長い文で書いたり話したりできるよう、ペアやグループで伝え合いを行う活動を充実させる。
算数	具体物や図などを用いて数を数えたり、加減の計算をしたりできる児童が多いが、それらがないと計算が難しい児童もいる。また、問題文の意味が正しく理解できないため、計算の仕方が理解できなかったり、正しく答えが出せなかったりする児童も多い。問題文の意味を丁寧に説明し、何を問われているのか、どう計算するのか等の具体的なイメージをもたせていく必要がある。	数量のイメージがもてるまで、必要な児童には具体物としてブロックを操作させながら計算をさせていく。また、その際には5のまとまり、10のまとまり等、計算する上で大事になる数のまとまりをしっかりと作らせていく。数の合成、分解についても丁寧に見直しを行っていく。	支援が必要な児童には、パワーアップ講師と児童の学習の定着状況を共有しながら個別支援を行う。また、学習した内容が生活の中で活用できるよう、身の回りにあるものの数を計算で知ったり、長さ比べをしたりする等遊びの要素を取り入れながら、学びと生活をリンクさせていく。